
さよなら、イボイボ

くまの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら、イボイボ

【Nコード】

N0153A

【作者名】

くまの

【あらすじ】

若奥様で魔女見習いのマチルダは、人間界で愛する旦那様&ベイビーちゃんとハッピーライフを満喫中。でも、大切な家族でもある使い魔イボイボ（元人間）が「人間に戻ってこの家を出て行く」と言い出した！

（前書き）

このお話は現在開催中の蛙祭出品作です。

『マチルダ様、イボイボはお暇乞いをするゲロ』

使い魔が鳴いた時、私はキツチンで玉ねぎをスライスしていた。

「――へ？」

それが、あんまりにも唐突だったから、もうちょっとで指まで切ってしまうところだった。

玉ねぎと人肉入りのミソスープなんて、いくら奥様は魔女見習いといってもキツイと思うわ。

それだけでなく、私の旦那様は人間だから、マイ好物の『イモリの黒焼き』だって粉末で入れなきゃいけないワケですよ。

でもね、私の旦那様ったら本当に好き嫌いがなくて、何でも食べてくれるから……うふふふ。

『聞ってるゲロ？ 三百一年の使い魔の年季が、五月の第二土曜日で明けるんでゲロ！ 明日ゲロよ！』

私は自慢のロングヘアをかきあげると、

「はいはい、よかったじゃーん」

と言つてあげた。

この投げやりな態度がお気に召さなかったらしく、足許にいた茶色のイボ蛙はまな板の上にぴよこんと飛び乗ってきた。

そのうえ、ヤツは玉ねぎスライスを足蹴にすると、私のキュートな顔に向かって口からくっさい汁を吐き出した。泥棒痴漢撃退用のヤツだから、ものすごく強烈で眩暈がした。

『他に、何か言うことはないゲロか？』

花柄のエプロンで鼻を押さえると、私は心から祝辞を述べた。

「うつつ、イボイボ様、そではおべでどうござびばず（それはおめでとうございます）。こでいいいど（これでいいの）？」

私のひいひいばあちゃんに使い魔にされたイボイボは、試験魔法の実験体にされたり、異世界への魔術材料の買出し決死隊にされた

りして大変だつたらしいから、確かにこのぐらいは言つてあげなきゃいけないかもしれない。

でも、今はサラリーマン家庭を取り仕切る、主婦暦一年のマイサポートをすればいいだけだし。かなり楽になつてゐるハズよ。

金色のどんぐり眼をギョロリと動かすと、

『ついては、イボイボにかかった蛙変化の魔法を解いて欲しいゲロ』
イボイボはおごそかに頭を下げた。

実は、ヤツは人間なのだ。

イボイボがイボ蛙にされたのは、私のひいひいばあちゃんが大切にしていた飴菓を盗み舐めたのが原因だと聞いている。伝聞形式なのは、ひいひいばあちゃんが死んでしまったからではなくて、老人性痴呆で記憶がスパークしちゃつてゐるから。

私のパパママもおじいちゃんおばあちゃんもひいじいちゃんひいばあちゃんもひいひいじいちゃんも他界しているのに、なぜかひいひいばあちゃんだけは魔界で元気に暮らしている。かなり謎だ。

「それは直接の契約主のひいひいばあちゃんに言つてよ。自慢じゃないけど、私は高等魔女訓練を途中で挫折した魔女見習いよ」

そのあげく、魔術学校をサボつて遊びに来ていた人間界にそのまま居つき、人間とデキ婚した愚かな娘だと、魔界では噂されているらしい。

『ちつとも自慢じゃないゲロ。マチルダ様のフィアンセじゃなくてもキレルゲロ！』

憎らしいことを言うと、イボイボは自分の部屋（があるのだ！）から一冊の古びた魔術書を背負つてきた。ここまでされたら、旦那様のための夕食作りを中断せざるをえない。

私とイボイボはリビングのソファに腰を据えると、ぼろぼろになつた魔術書と向かい合う。古代魔術語で綴られた本の一部を意識すると、

——古代より伝わつてゐる蛙変化の魔術を解きたいなら、三百年の後、施術主の取り決めた異性からキスをもらわないとダメダメ。

とあった。

だとすると施術主で、その後、イボイボを使い魔にした契約主、つまり私のひいひいばあちゃんから情報を引き出さないといけないワケだけど。

「イボイボ、かわいそうだけどあんたは一生イボ蛙のまんまよ。今のひいひいばあちゃんは初歩魔法も満足にそらんじられない有様なもの」

彼のぬめり気を帯びた前足を手に取って、私は慎重に言葉を選んで言ってやった。のに、当の本蛙ときたら余裕しゃくしゃくで、手の中からすり抜けてしまった。まったくシャクに触るったらないわ。『ふん、片腹痛いゲロ。主が取り決めた相手はイボイボが知ってるゲロよ』

イボイボはゲゲゲと高笑いすると、ソファアの上でふんぞり返る。使い魔といっても、私の数倍年上だからと敬っていたら、こんなエラそうな態度をとるようになってしまった。

人間年齢に換算すると、十八歳（実年齢はヒミツ）で家を飛び出した私と、後を追ってきたボディガードのイボイボとの関係は、今では家族に限りなく近い。口うるさい父親、はたまた兄のようなイボ蛙なのだ。

「なら、最初から言いなさいよ。わざわざ魔術書なんて持ってきてきちゃってさ」

私はチェリーピンクの唇をとがらせる。

『イボイボの言葉だけじゃ、信用がないと思ったゲロよ。主は魔王様より性格が悪いゲロ』

古きよき魔女としては平均的だと思うけど、現代魔女（見習い）の私からすると、げげっ残酷非道！マジ、そこまでやる？と思う逸話は数多く耳にしている。

だから、性格うんぬん……の否定はしない。

性格の悪い魔女が選ぶ、キスのお相手って誰なんだろう？ 傍若無人を地でいくイボイボですら躊躇する相手って？

それは、素晴らしくプリティーな唇と抜群のプロポーションの持ち主に違いないわね。――あつ。

「もしかして、私なの？」

「それなら、まだマシだったゲロ」

気弱に鳴いた後、イボイボはとんでもないことを言い出した。ひいひいばあちゃんが取り決めた相手、それはなんと、私と旦那様のスウィートベイビーちゃんだったのだ！

「マチルダさん、ただいまあ」

知つての通り、イボイボは口からスキャンク級の臭い汁を出す。その他にも、神経毒を含んだ青汁や催眠汁や消火液、防御のための煙幕も出せる多彩な技を持つ使い魔だ。

まだ意識のはつきりしていたひいひいばあちゃんが、目の中に入れても痛くないひいひい孫の後を追わせただけはある。

ああ、私にも使い魔がいれば少しは戦力になるのに……。きちんと魔女修業しなかったのが、ココにきて痛いわ。

「ただいま帰りましたけど………おい」

――つて、反省してる場合じゃないわよ！

そんな危険なイボ蛙とキスなんて、母親としてさせられない！

それにベイビーちゃんだって、大きくなってからファーストキスがイボ蛙（♂）だなんて知ったらグレてしまうわ！

ぼつ。私は手の平に自動発生した火炎を丸めると、腕を大きく振りかぶつて投げた。

「うわっ、なんだよ。自分の旦那に、いきなり火の玉を投げつけるヤツがあるか！」

耳慣れた男性の怒鳴り声で、私はようやく我に返る。寝室の入口に立っている黒焦げスーツ姿も素敵な青年は、まぎれもなく私の旦那様だ。

「いやだ、火傷しなかった？ ごめんなさい」

私は魔力が未熟なので、意識をしっかりと持っていないと火炎系の

術が暴走してしまう。

でも、今のはそれとは微妙に違う。テリトリー内に生命反応が出たら、無差別に攻撃を仕掛けるように意識をセットしてあったのだ。私はこう見えても、魔界でも名家の娘よ。魔術は未熟でも魔力自体は一級品。火の玉には安全装置がかかっていて、スーツの前面だけを的確に灰にしていた。

「怒鳴ったりしてゴメン、大丈夫だよ。このスーツは魔界の防火繊維でできているから、明日には復元してるさ」

優しく言っと、前面だけ半裸の旦那様は私にただいまのキスをしてくれる。

どうも、私はベッドで眠るベイビーちゃんを見守りながら、夕飯の仕度もせずに途方に暮れまくっていたらしい。そのせいで、旦那様が帰宅したことに気がつかなかった。なんたる失態！

「本当にごめんなさい、今すぐに夕食の準備するから。先にお風呂に入ってくれますか？」

「うん。そういうば、イボイボ君の姿が見えないんだけど」

「それに関しては、ちよつと色々ありすぎちゃって、一言じゃ事情を説明できないの」

ああ、マズイ。と思ったときには、旦那様の両目はキラキラ輝いていた。三十歳になっても少年の心を忘れない、ピュアな人間なのだ。

「じゃあ、頑張つて一言で説明してくれないかな？」

……………私、旦那様の好奇心旺盛なところは嫌いじゃない。じゃなきゃ、魔女（見習い）の女の子と結婚なんてしないだろうし、ね。でも、ちよつと疑問は浮かんできて。夕食はそっちのけで新婚夫婦が仲良くベッドに座って、することといったらイボ蛙の話よ。

「——なるほどね。君のひいひいおばあさんもあくどいことを考えるなあ。それじゃあ、三百年が経っても、イボイボ君はイボ蛙のまんまだ。あはは」

パジャマに着替えた旦那様はのんきに笑いかけ、こちらを見て青

ざめた。

「…………マチルダさん、いつ着替えたんだい？　SMの女王様みたいだよ」

「魔法の正装です！」

私は家出時に着ていた猫ミミ付き黒いとんがり帽子と、同色のドレスを一瞬で身にまとっている。気合を入れるためだ。

今やイボイボは私を敵に回す覚悟で、マイスウィートの唇を奪う気なのだ。現に旦那様が帰宅するまでの間、四度もこの部屋に侵入しようとした。

そして、私は四度、《ファイアボール》で撃退したけど煙幕で完璧に防御された。さすがは、ひいひいばあちゃんの使い魔よ。

こうなったら、母親である前に魔法たる私ができることは一つしかない。血の誇りにかけて、昔ならった魔法教本の内容を思い出し、イボ蛙に対抗することだ。

「でも、マチルダさんはイボイボ君に勝てるの自信あるのかい？

僕が君のフィアONSEに襲われそうになったときも、うちに泥棒が入ったときもイボイボ君に助けてもらったんだよね」

「だって、ヤツの役目は私のボディーガードだもん」

「いや、そうじゃなくて……」

言いよどむ旦那様の唇にキスして、私は明るく笑ってみせる。

「火炎系は《ファイアウォール》まで完璧に思い出したんだもん、大丈夫よ。でもね、ヤツの苦手な氷水魔法スレシアの詠唱って二小節目が難しいのよ……ええーと、『偽の淡黄色をともなう淡い白と黒、不完全な白と赤と』……………？」

《スピア》は敵の脳天に氷の刃をお見舞いする、一撃必殺の技よ。ぜひとも、思い出したい。

「…………マチルダさん、マチルダさん」

「何？　今、忙しいんだけど」

部屋の入口をにらみつけていた私に、旦那様の美声とイボイボのダミ声がかけられた。

「ものすごく言いにくいんだけど、イボイボ君が僕の背中に張り付いているんだよ。さつき、寝室に一緒に入ってきたらいいね」
『そうだゲロ』

私は振り返りざま右手を掲げ、火炎系の最強魔術ファイアウォールを唱える。磨き上げられた床から立ち上る三つの火柱に驚いたのは旦那様だけ。

ベッドに座ったまま魔界の業火を観賞する人間なんて、世界中さがしても彼ただけだわ。ただ、熱の影響を受けて髪の毛はアフロヘアになっちゃってる……ゴメンね、旦那様。

「みつつ数える間に降参したら、命ばかりは助けてあげるわよ！」
熱風にまくれあがるドレスの裾を右手でおさえながら、私は怒鳴る。スリーカウント待っても返答がなかったので、左手で空気をあおいで炎の勢いを上げた。

「……………あちち……イボイボッ、いい加減に観念しなさいよっ！」
私の髪とお肌が熱ダメージを受けちゃうじゃないっ！マジで早くケリをつけなきゃ。

『イボイボは使い魔歴三百一年ゲロ。半人前のマチルダ様にやられるほど、落ちぶれていないゲロ』

火柱によって天井に押し付けられていたハズのイボイボは、口から泡状の消火液を吹き出す。あっさり炎柱は無力化されてしまった。確かに、安全装置のかかった中途半端な術では、イボイボを燃やすことはできないのかもしれない。

でも、そうしないと、旦那様とマンションが焼けちゃうじゃない。第一、攻撃と防御を同時にこなせるほど、私は魔女としてのキャリアがない。うちのマンションに泥棒が入ったときだって、イボイボが攻撃してくれて、私は旦那様とベイベーちゃんをガードするだけでよかったんだもん。

「まあまあ、いい加減にして二人（？）とも落ち着いて話し合おうよ。困難なときだって、ちゃんと打開策が用意されているものだよ。だから、僕達は夫婦になれているわけなんだからさ」

アフロヘア（被害者）の旦那様から、あくまでも穏やかに諭され

てしまうと、私ってちょっと大人げなかったかも？　なんて反省してしまうわ。

「……そうね、イボイボ話し合いましたか？」

「……そうゲロね」

「僕が思うに、その魔術書にキスの種類が記述されていないのが、抜け穴だと思うんだよ」

言いながら、旦那様はベッドのサイドテーブルの上に手を伸ばす。この引き出しには、ベイビーちゃんのガラガラや哺乳瓶の予備が置いてある。彼が取り出したのはおしゃぶり。

「まさか、間接キスもキスのうちだって言いたいのか？」

あぜんとする私とイボイボを尻目に、旦那様は意気揚揚とおしゃぶりをベイビーちゃんの口に含ませる。それから、「はい、どうぞ」と誇り高き使い魔に差し出したのだ。

「……………」

当然、プライドの高いイボイボは怒り狂うと思った。のに、ヤツは素直にくわえた。それほど人間に戻りたかったのね。でも、それだけじゃ不安だったのか、おしゃぶりを丸ごと飲み込んでしまった。私と旦那様は正座したまま、息を殺して使い魔の変化の様子を見守った。でも、イボイボは数秒後も、数分後も、数十分後も、いつまで経っても茶色のイボ蛙のままだった。

部屋の壁時計が十二時を回った。

「騙したゲロね！」と低く鳴いて、イボイボはその場で垂直に飛び上がった。ヤツの視線の先には、私と旦那様の大切なベイビーちゃんが見るベイビーベッドがあった。

「——もう許さんゲロ、その唇はもらったゲロツ！」

その言葉を聞いた瞬間、私のなかで眠りにつこうとしていた過去百数十年に渡る魔女の叡智が蘇った。頭のとっぺんからつま先までを貫くのは、威力甚大な魔王様の力だ。

きつと、ひいひいばあちゃんもひいひいばあちゃんもばあちゃんもママも、そして、他の正統な魔女達も魔力を高めるための詠唱などし

なかったのだ。魔界のかの君と意識をつなげるだけで、彼の無尽蔵にある魔力が身のうちに注がれるから……。

ああ、これが魔法を使うということなんだわ。

私は立ち上がると、おもむろに両手を上げて、魔界の海を回遊する氷山すべてを呼んだ。

「――《スパア》！」

マズった！　と思った瞬間にはもう遅い。全力の《スパア》に安全装置はかからない。寝室の天井から数千数万の氷の刃が降り注ぐ。どんがらがっしょーん。

ダブルベッドとベビーベッド、サイドテーブル、フローリングの床に至るまでズタズタに裂かれた悲惨な惨状だった。それでも、マンション壊滅！　みたいな最悪の事態にはならなかった。

私の旦那様とベビーベッドの周囲には、乳白色の煙がバリアを張ってれていたのよ。イボイボの煙幕だ。

「よかったあ、マンションの住人なんかどーでもいいけど、旦那様とベビーちゃんが死んじやったら、私も死んじやうよぉ！」

床で腰を抜かしている旦那様に駆け寄ると、彼はしっかり私を抱きとめてくれた。頭をイイ子イイ子してくれる。

「今度、会社のヤツらに自慢しよう。可愛くて料理が美味くて魔法も使える嫁さんもらった男なんて、僕だけだろうなあ」

人外の力を発揮するのを目の前で見て、やっぱり旦那様はそのままだった。

『まったく、考えなしの魔女と旦那だゲロ』

イボイボがベビーベッドの下から飛び出してきた。ヨロヨロしているのは、私の気のせいじゃない。顔の左半分を氷の刃にえぐられちゃったせいで、体のバランスがとれないみたい。

『今の感覚を忘れないで欲しいゲロ。イボイボがいなくなったら、旦那様と二人で助け合っていくゲロよ』

白く濁っていく彼の右目に、私は初めて不安を覚える。旦那様の

腕のなかから、床にへばりついているイボイボの許に駆け寄る。

「イボイボ……あんた、何いつてるの？ 蛙変化の術を解いて人間に戻るんじゃないかったの？ せつかく、三百年と一年も待つてたのに……」

ああ、旦那様がとっても悲しげにうめいた。

「マチルダさん、蛙変化つて実は一年も前に解くことができるはずなんだよ。でも、三百と一八歳のヨボヨボのイボイボだよ。そんな姿を君には見せたくなかったんじゃないのかな？」

人間の身体構造が、魔女とは違うことぐらいわかっている。百年と少しも生きれば長寿だといわれる種族なのだ、人間は。

「ちよつと、待ちなさいよつ、イボイボっ！」

私は血と脂でぬめる体を驚づかみにする。いつもなら弾力のある皮膚が、濡れた革表紙の魔術本みたいだった。

「私の《スピア》のせいで死んじゃうなんて、絶対に許さないから！」

「イボイボは死ぬのとは違うゲロ。お暇乞いをするだけゲロ。魔女の使い魔は年季が明ければ、輪廻の輪に戻るゲロ」

最期に大きいため息について、それきりイボイボはガマ口を開かなかった。

旦那様も私もしばらく無言のまま、冷たくなっていくイボ蛙を見ていた。通常の死とは違うから蘇生術は効き目がないだろうし、本人もそれを望まないと思った。

だから、私は手の中にある、魂の抜け切る寸前のイボイボにお別れのキスをした。唇にピリリと痛みが走った。

私はそのときに起こった不思議を、死ぬまで忘れることができないだろうと思った。醜い茶色のイボ蛙の体が伸び縮みすると、私と同じ年頃の美少年の姿に変化した。蛙変化の術が解けたのだ！

ひいひいばあちゃんが取り決めた相手は、私だったのよ。

「……………マチルダ様」

「スゴイじゃない。旦那様には負けるけど、今のあんたは私好みの

イケメンよ！」

私はウインクを決めて、親指を立ててみせる。イボイボは強情っぱりで心配性なヤツだから、泣いてなんかやらないのだ。

少年だったのはつかの間だった。残念なことに、みるみるうちに深いシワとシミが紅顔を覆い尽くすと、最後には仙人様みたいなヒゲをたくわえた白髪頭の老人になった。

「あんたって、本当にバカなイボ蛙なんだから……ほら、あんた、このマチルダ様に何か言うことがあるんじゃないの？」

前々から、お慕い申し上げておりましたとかね。老けてもちよつと男前の老人は、

「……イボイボのベッドの下にある雑誌類は、中身を見ないで燃やして欲しいです」

と、告白した……。

「……………わかったわ」

私は枯れ枝みたいな腕をとって、力強くうなずいてみせる。

さよなら、また会いましょう、イボイボの蛙だった老人は私にささやいた。それから、干からびた皮膚と骨は真っ白な灰になって宙に消えてしまった。

さよなら、イボイボ。私もつぶやいて、両手を広げて待っていた旦那様の胸に飛び込んでいった。

ちなみに、さすがはというか、底意地の悪いひいひいばあちゃんの使用魔だけあるというか……。それから一週間、私のキュートな唇は風船みたいにふくれあがって人前に出られなかった。もちろん、旦那様ともベイビーちゃんともキスができません……。

旦那様はそれがイボイボの気持ちだよ。って笑っていたけど………。私は天国に顔のきく天使に、イボイボへのメッセージを頼むことにする。

——イボイボのバカ蛙！ 次に出会ったら、覚えていらつしやいっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0153a/>

さよなら、イボイボ

2010年10月8日15時16分発行